

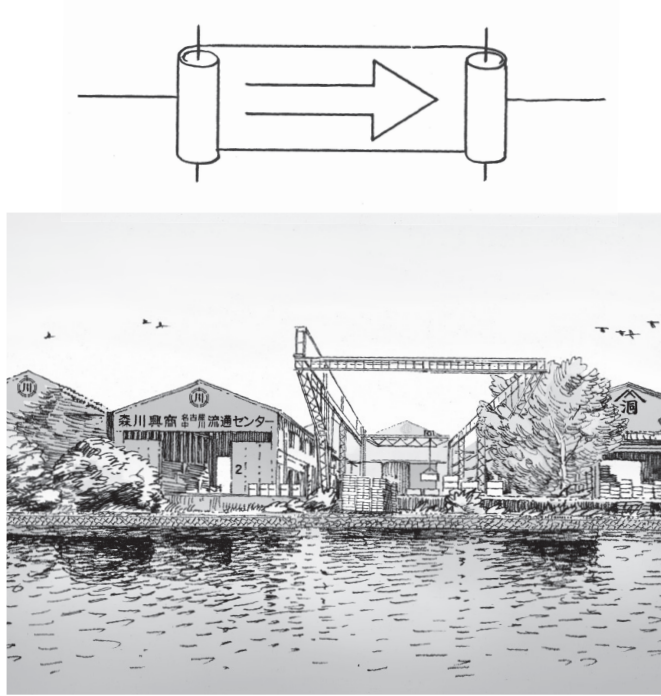
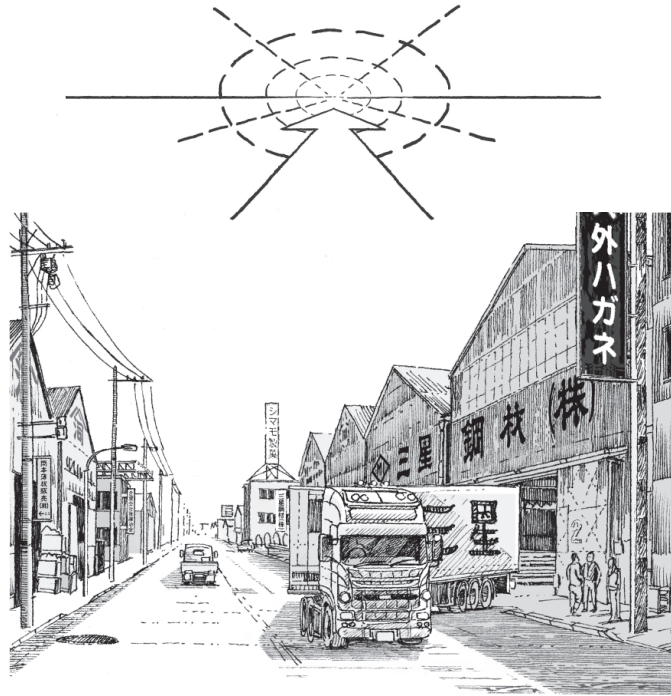
オートスケープとボートスケープ

アメリカ合衆国の建築家R・ヴェンチュリは、商業主義建築が建ち並ぶラスベガスのロードサイドを「オートスケープ」という言葉で表現しました。オートスケープは、自動車で移動する人から見られることを前提とし、大型の広告塔や道路に向けて垂直に張り出す看板によって自己主張する建物が連なる眺めです。車上にいる人の視線ははるか先の消失点の方を向くため、すぐに過ぎ去ってしまう近傍の様子はかえってわかりにくいです。

これに対して、ゆっくり移動する船に乗る人は、移動方向に制約されることなく、自由に周りを見渡せます。とくに、中川運河のような

水路を船で行くと、護岸とその上の建物や緑、人間の活動が手に取るようにわかり、それらが一体でゆっくり並行移動してゆく「ボートスケープ」を見ることができます。運河沿いの建物の中に、社名やロゴを壁面に直接ペイントしたものが多いのは、それが船上の人の視覚に効果的に訴えるからでしょう。

中川運河には、水路兩岸の倉庫敷地を挟んで、ボートスケープとオートスケープの両方があります。そのことがわかれば、ドライブでは味わうことのできない、船ならではの楽しみが倍加して感じられるにちがひありません。



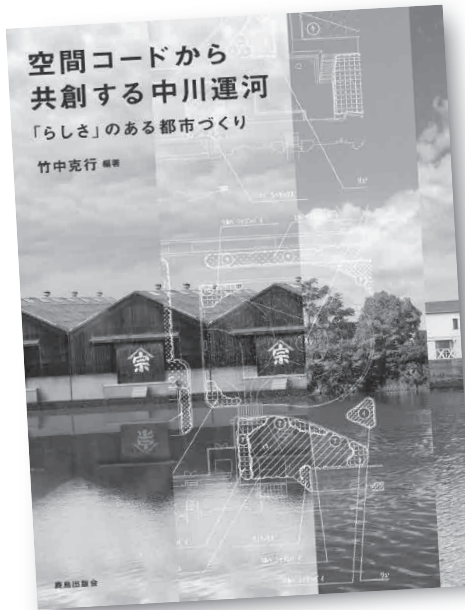
絵で見て考える中川運河の「らしさ」

都市の「らしさ」は、直感的にはわかっていても、言葉にしにくいものです。視界に収まらないスケールの大きな特徴、目前にあっても気づきにくいリズム、意識化されていない付き合いの作法など。

そうした言語化しにくい町の底流をつくる脈を可視化するために、『絵で見て考える中川運河の「らしさ」』と題する本シリーズを制作しました。

絵からヒントを得ながら、未来の都市づくりのために想像力を働かせましょう。

『空間コードから共創する中川運河』
鹿島出版会(2016年)
ISBN: 978-4306073203、2,500円+税



中川運河の空間コード

- A1 海に向かう都市の層 (2018/12既刊)
- A2 閘門式運河の水面 (2018/03既刊)
- A3 人工の自然堤防 (2021/12既刊)
- A4 緑のコリドー

- B1 運河を挟んで向き合う (2019/08既刊)
- B2 インダストリアル空間 (2020/02既刊)
- B3 鳥と風が運ぶ都市の緑 (2020/09既刊)
- B4 連続体の美学 (2022/10既刊)

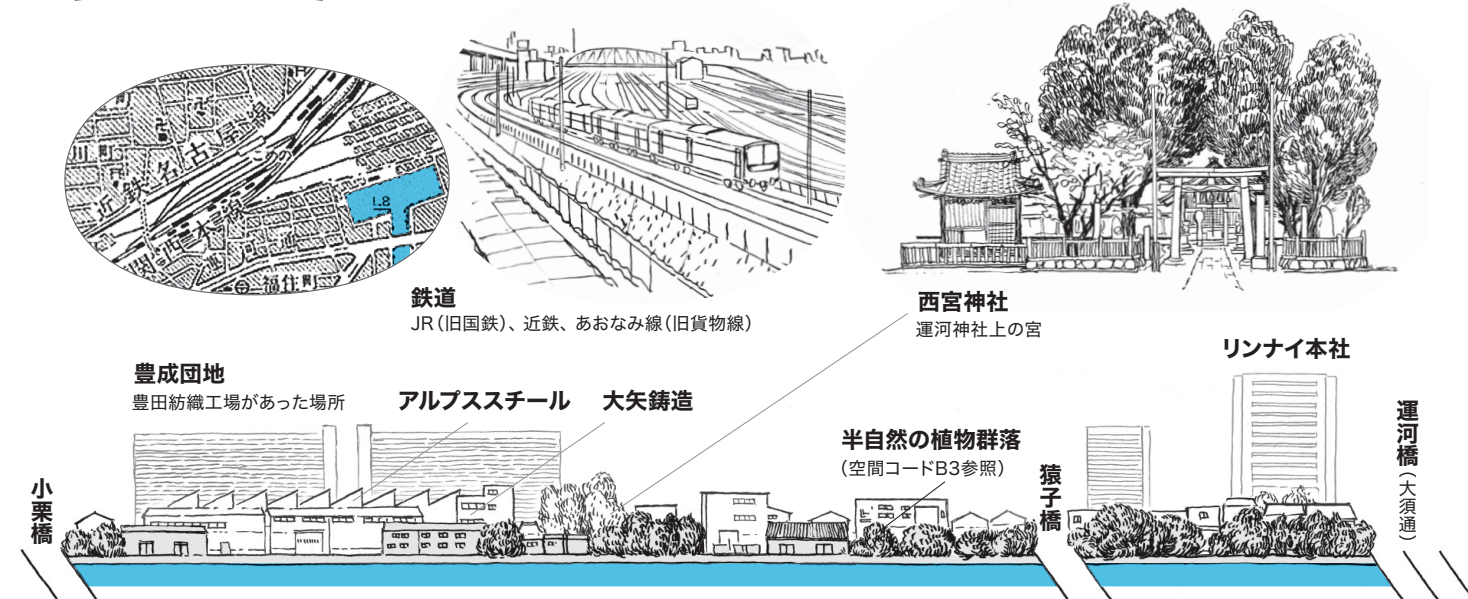
- C1 名古屋の大静脈
- C2 インタラクトする水土
- C3 「自然」とのつきあい
- C4 創造力の空間

『絵で見て考える中川運河の「らしさ」』B4、2022年10月 制作・頒布：都市コミュニケーション研究所 (riuc.takenaka-lab.net)
代表：竹中克行(愛知県立大学教授)、イラストレーション：クレメンス・メッツラー、解説：竹中克行



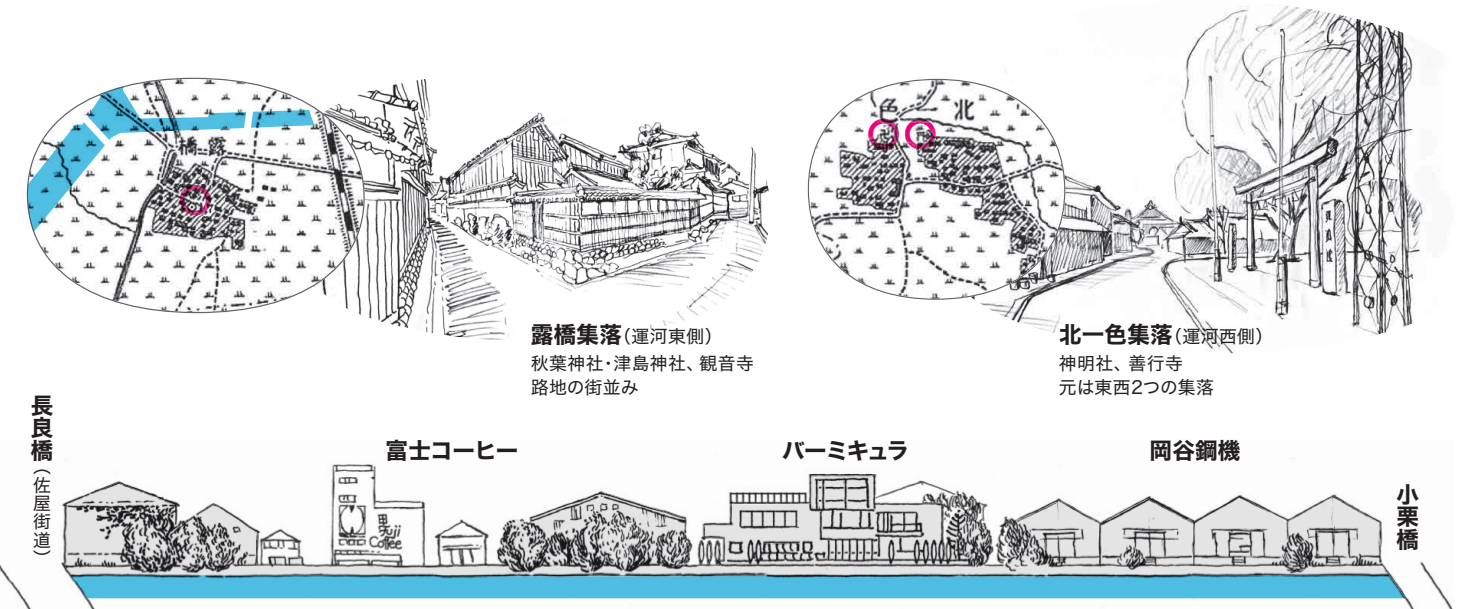
絵で見て考える中川運河の「らしさ」

連続体の美学 時を刻むボートスケープ



① 月島町・運河町

いずれも運河開削後の市街化とともに生まれた町で、運河に先立つ箕瀬川・中川の一部が道路の形に痕跡をとどめています。西宮神社は、数々の由緒の最後に運河総鎮守の役割を位置づけました。ここは、古きと新しきがパズルのように合わさる場所といえるでしょう。



② 舟戸町・広川町

小栗橋と長良橋に挟まれた区間では、幅広の水面の彼方に名駅の高層ビル群が立ち上がる雄大な風景を楽しむことができます。水面の上に箱型や三角屋根の建物と緑が連なり、その背後には、北一色(西側)と露橋(東側)という、歴史的な聚落が佇んでいます。

挿絵の地図は、国土地理院(旧陸地測量部)が発行した旧版地形図からのカットです。運河町付近は昭和43年改測、佐野町は昭和13年三修で、それ以外は明治24年測図または明治31年修正の地形図となっています。

中川運河のボートスケープ

伊勢湾奥と都心の堀留を結ぶ「細長い港」、中川運河の風景は、船に乗って全線を移動することで体感できます。左右両舷に手を広げて2艘の屏風のような眺めを手繰るのは、中川運河ならではの貴重な経験です。それは私たちの感覚を通して像を結び、記憶の中に

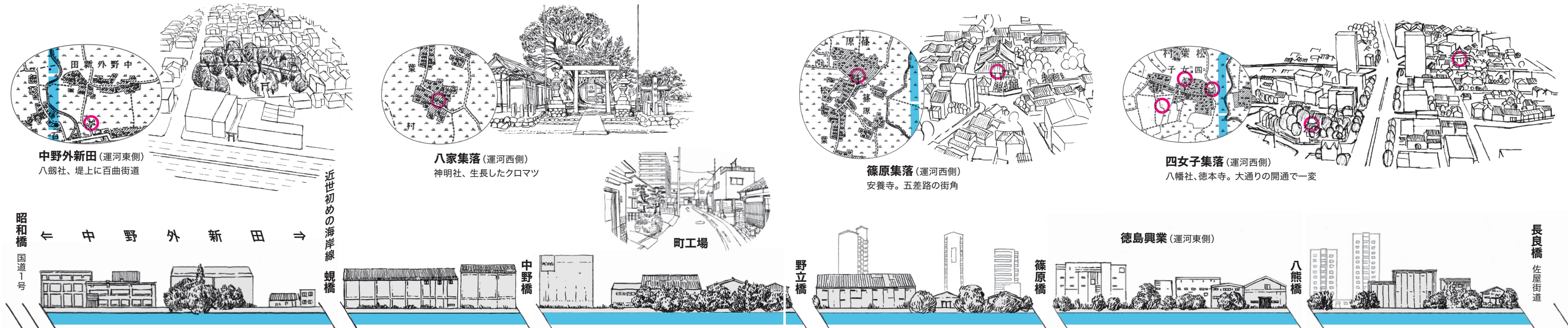
連なってゆくにちがいありません。

屏風の継ぎ目にあたる中川運河の橋にも注目してください。都心寄りの橋には、近世以前から周辺に存在した古い集落の名前が付けられ、海寄りの橋では、江戸時代以降の開発の履歴を示す名称が

みられます。それに対して、運河建設時の区画整理で生まれた両岸の町には、水路を挟んで西側・東側にそれぞれ「船」と「川」を付した町名が与えられました。

中川運河は、都心から海港まで、土地柄がさまざまに異なるエリアの

中を縦断しています。水路を挟んで工場や倉庫が向き合うポートスケープは、一定のリズムをもって連なる屏風のごとき絵であるばかりでなく、運河という共用インフラのおかげで結ばれた数々の境界の風景と一体化して、中川運河のランドスケープの一部をなしているのです。



⑤ 福船町・福川町

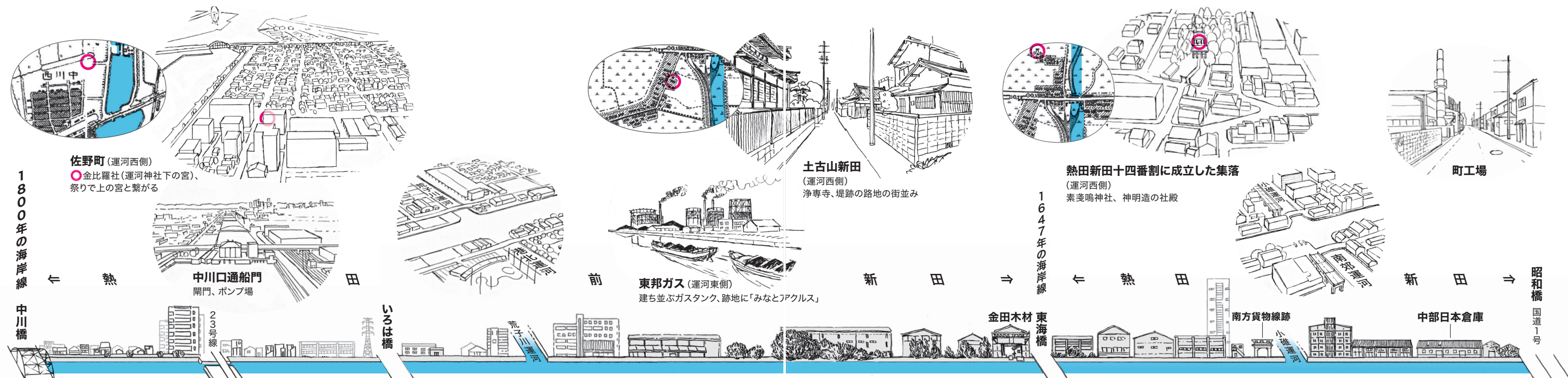
近世初めには、篠原(丸米野)に繋がる八家のすぐ南まで海が広がっていたことでしょう。
 蛸橋から港寄り、江戸時代の新田開発で生まれた干拓地です。最初に開かれたのが
 中野外新田で、堤のすぐ脇に熱田の神様を勧請したという八劍社が建てられました。

④ 清船町・清川町

都心からこの辺りまでは、近世初めにはすでに聚落が分布していました。清船町が接する篠原（丸米野）と清川町の東に位置する中野や野立は、河川の自然堤防がつくる微高地上に成立した村であり、いずれも、中川運河整備に伴って橋の名前に採用されました。

③ 富船町・富川町

長良橋から荒子川運河・港北運河までは、兩岸の町に「船」と「川」を対にした名前が与えられました。佐屋街道の南に位置する四女子^{しよし}と二女子^{によし}は歴史的な聚落です。両者の間に運河が開通したさい、四女子の村社である八幡社は新しい大通りへと移転しました。



⑨中川本町

南北約1.2kmにおよぶ中川本町は、中川口通船門の内(北側)と外(南側)で大きく性格を異にしています。通船門と中川橋の間は、舟運の盛期には船溜まりとして利用され、その西側に成立した稠密な市街地には、数多くの舁の船頭や家族が生活していました。

⑧ 金船町・金川町

東海橋から中川橋までは、熱田新田の後に続く土古山新田を除いて、18世紀に開かれた熱田前新田の範囲にあたります。ここでもう一つの横堀が本線と交差します。一帯には田畑が広がっていましたが、やがてエネルギー・物流の大規模な施設に変わりました。

⑦ 新船町・新川町

橋の間隔が最も長いのは、昭和橋（現国道1号）から東海橋（東海通）までの約1.3kmです。両者に挟まれた太い帯状のエリアが、17世紀半ばに開発された熱田新田にあたります。この区間の中ほどに設けられた横堀は、運河の風景にアクセントを与えています。

⑥ 玉船町・玉川町